

高知県中土佐町  
久 札 城 跡

1984年3月

高知県高岡郡中土佐町教育委員会



SB-01 完掘状况



SB-03 完掘状况

## 序

佐竹氏の居城であった久礼城跡（昭和51年10月町文化財指定）の確認調査がおこなわれたのは、昭和46年11月頃からで前田和男先生（当時窪川高校教諭）が実施され、その報告書が中土佐町文化財調査報告書第一集（昭和47年6月発刊）に発表されたのが初めてであります。その後、同報告書第三集（昭和48年9月発刊）に二の丸下の土塁群について補足報告されております。

今回、町史を編さんするにあたり、この機会に更に詳しい資料を得るために、文化庁の許可をうけ、県文化振興課の援助のもとに、岡本健児先生（高知女子大教授）、前田和男先生（高知追手前高校教諭）、宅間一之先生（県教委文化振興課）のご指導のもとに詰の発掘調査をおこなうことができました。

今まで樹木の下に埋もれ、見ることのできなかった多くの礎石が発見され、専門家の方々からも大変貴重な成果であると評価されております。

報告書を発刊するにあたり、ご協力をいただいた先生方、また発掘作業に応援いただいた多くの方々に厚くお礼を申しあげます。

昭和59年2月25日

中土佐町教育長 小島正一

## 例　　言

- 本書は、高知県高岡郡中土佐町教育委員会が、町史編纂のための資料収集を目的として実施した久礼城跡遺構確認調査の概要報告である。
- 調査は、中土佐町教育委員会が主体となり、岡本健児（高知女子大学教授、高知県文化財保護審議会委員）、前田和男（高知追手前高校教諭、高知県文化財保護審議会委員、中土佐町史編纂委員会委員）、宅間一之（高知県教育委員会文化振興課社会教育主事）があたった。
- 本書の執筆は、第一章前田和男、第二章遺構は宅間一之、出土遺物は岡本健児、第三章は宅間一之が担当し、編集は宅間一之があたった。
- 調査協力者は次の通りである。

中村 時春	前田 善男	田中 利穂
中村 茂	古川 春実	下元 福義
山崎 テル子	正木 延喜	山岡 槟木
松岡 晴暉	奥田 義教	浜田 豊寿
浜田 健一	浜田 末吉	国沢 猛
国沢 反男	浜田 保夫	森 三夫
山本 建生	田所 弥助	多田 昭介
山田 耕造	奥堂 初男	楳田 幹男
下元 正男	岡田 巧	小島 正一
山本 吉信	林 勇作	吉村 勝之
山崎 森一	吉本 和家	政岡 肇
吉田 敏彦	竹本 稔	
田中 稔	山本 洋子	

## 本 文 目 次

第 1 章 城跡の概要.....	1
I 位置.....	1
II 由来.....	3
III 城構え.....	5
第 2 章 調査の概要.....	9
I 遺構.....	9
1 碓石建物跡（SB-01）.....	9
2 碓石建物跡（SB-02）.....	11
3 碓石建物跡（SB-03）.....	12
4 追手部周辺の確認調査.....	13
①西側土塁.....	13
②東側土塁.....	15
③追手門部.....	15
5 土壌状遺構の確認調査.....	16
6 捜手部土塁構築法確認調査.....	16
II 出土遺物.....	16
1 明染付.....	17
2 土師質土器.....	17
3 鉄釘・古銭.....	18
第 3 章 おわりに.....	19

## 図面目次

- 図1. 久礼城跡位置図
2. 久礼城遺構概要図
3. SB-01 実測図
4. SB-02 実測図
5. SB-03 実測図
6. 西土壘、東土壘腰巻石積概要図
7. 詰部分 実測図
8. 詰東部及び二の段東部実測図

## 図版目次

1. 久礼城跡航空写真  
久礼城跡全景（北より）
2. 久礼城跡全景（東より）  
発掘に先だっての祭事
3. 詰部（東より）  
詰部（西より）
4. SB-01 完掘状態（東北より）  
SB-01 完掘状態（西より）
5. SB-01A列 碇石（北より）  
SB-01E列 碇石（南西より）
6. SB-01E列 碇石および雨おとし溝（北より）  
SB-01E列 碇石と雨おとし溝（北より）
7. SB-02 発掘状況  
SB-02 完掘状態（北西より）
8. SB-02 北礎石（西より）  
SB-02 東礎石（北より）
9. 佐竹神社裏SB-03発掘前（東より）  
SB-03 発掘前
10. SB-03 西南隅土壘（東より）  
SB-03 西土壘石垣状遺構

11. S B—03 発掘状況  
S B—03 完掘状態（北より）
12. S B—03 A列礎石（北より）  
S B—03 C列礎石（北より）  
S B—03 北部礎石（北より）
13. S B—03 7列礎石（東より）  
S B—03 3列礎石（東より）  
追手部全景（東より）
14. 西側土塁全景  
西側土塁追手部石垣遺構
15. 西側土塁腰巻石垣（南西より）  
西側土塁腰巻石垣（東より）
16. 西側土塁より東側土塁をのぞむ  
東側土塁盛状況（西より）
17. 東側土塁追手部腰巻石垣（西より）  
東側土塁腰巻石垣（西より）
18. 追手門全景（詰部より）  
追手門部完掘状態（南より）
19. 追手門部石段（北より）  
追手門部 門がまえ東土塁側（北より）
20. 追手門部 門がまえ東土塁側細部（北より）  
追手門部 門がまえ西土塁側（北より）
21. 追手部より二の段への道（下方より）  
追手部より二の段への道（上方より）
22. 土壙状遺構発掘前の状況  
土壙状遺構完掘状態（北より）
23. 土壙状遺構完掘状態（北東より）  
土壙状遺構完掘状態（南西より）
24. 土壙状遺構完掘状態（南より）  
土壙状遺構完掘状態（北より）
25. 掘手部西側土塁構築法（北より）  
掘手部西側土塁構築法（北より）
26. 出土遺物
27. 二の段遺構

- 全 景（西より）
- 全 景（東南より）
- 28. 全 景（西南より）
- 全 景（北西より）
- 29. 南土壘（西より）  
南土壘（西より）
- 30. 南土壘（東より）  
東端北側土壘（南より）
- 31. 西部石垣遺構（西より）  
西南隅堅掘部（北より）
- 32. 二の段より搦手部登り口（下方より）  
二の段北追手下方への土壘（東より）
- 33. 跡より南への尾根堀切部遠景  
斜面土壘にみられる石積
- 34. 三の段下方堅堀  
三の段下方堀切り
- 35. 城跡から久礼湾をのぞむ  
発掘調査にたずさわった人々



図1 久礼城跡位置図

## 第1章 城跡の概要

### I、位置

久礼城跡は佐竹氏の居城跡で、高岡郡中土佐町久礼の通称城山にある。国鉄土讃本線久礼駅の西方、海拔 103.5m の城山山頂に詰ノ段を構える城跡の北方下方には、久礼湾にそぐ久礼川の支流長沢川が東流し、自然の堀の役割をはたしているが、この長沢川の谷間は古くから南方の高岡郡現窪川町、西方の同郡現大野見村へ通ずる街道として利用せられ、長沢川中流から前者に通ずる道を添姫蛇、長沢川の上流から後者に通ずる道を本姫蛇といったが、現在はともに廃道となっている。又北方の現須崎市へは大新改・道ノ川を経て現在の土讃本線沿いに北進し、海拔 228m の焼坂峠を越えて通じていた。焼坂越えであるが、この道も現在はほとんど利用されていない。しかし、これらの街道のありかたからすると、久礼城は交通の要衝を扼する位置にあるといえよう。

城跡の東方下方には久礼の町並があり、町並の東には久礼湾がひろがる。東方直下には「土居」のホノギが残り、佐竹氏の土居があったとされているが確認のための調査が実施されたことはない。この土居のあったとされる城山山麓から、久礼湾をのぞむ地に鎮座する久礼八幡宮の鎮守の森までの間は湿田がひろがり、久礼城の東方の守りに大きな役割をはたしていた。この湿田地帯も今は市街化してその面影はなくなったが、この湿田地帯と長沢川との間には城山から伸びた尾根があり、今久礼中学校・久礼小学校の敷地となり、両校の敷地の間を国道56号が山を切り開いて通じている。この尾根も久礼城の縄張のうちに含まれるとするも、学校用地となってしまったため城塞的な施設は残らぬが、久礼小学校敷地の南に鎮座する金比羅神社周辺にそれらしきものを止めているといえよう。しかし、これとても定かではない。

宮地森城はその著『土佐国古城略史』に、久礼城について次のように述べている。「明治28年10月高岡郡に漫遊し、佐竹氏の墟に躊躇する。墟に四嶺あり、其山勢西南より東北に奔れり。道を村井の背後に取る。邇々村学を此の墟の第四嶺に移さんことを計り、山を裁り高きを築き低きを填め、砂砾砾々として足を投する地なし。數歩の間匍匐して第四嶺に到る、甚高からず、東西三十間、南北九間許、之を村学地とす。其の西を第三嶺とす、既に開拓し第四嶺と相通て平面也、其蘊状を存する者は數歩耳。又其の西南に距れば則第二嶺也、東西十七間、南北五間許、南辺に塚壙の存するあり。其の西南数百歩にして高嶺あり、之を第一嶺即ち本城台とす。（中略）又第四嶺の東に小丘あり、其間に空塗数條を穿てり、丘上に一龕あり、金比羅、秋葉山、愛宕の三神を合祭せり、是の丘も亦古の城域なり。（下略）」

尾根の東山麓は古くから久礼の町並の中心的な役割をはたしてきた地域で、かつての久礼の町並はここから東へのびて久礼湾に達していた。天正16年（1588）の久礼分地検帳によれば、

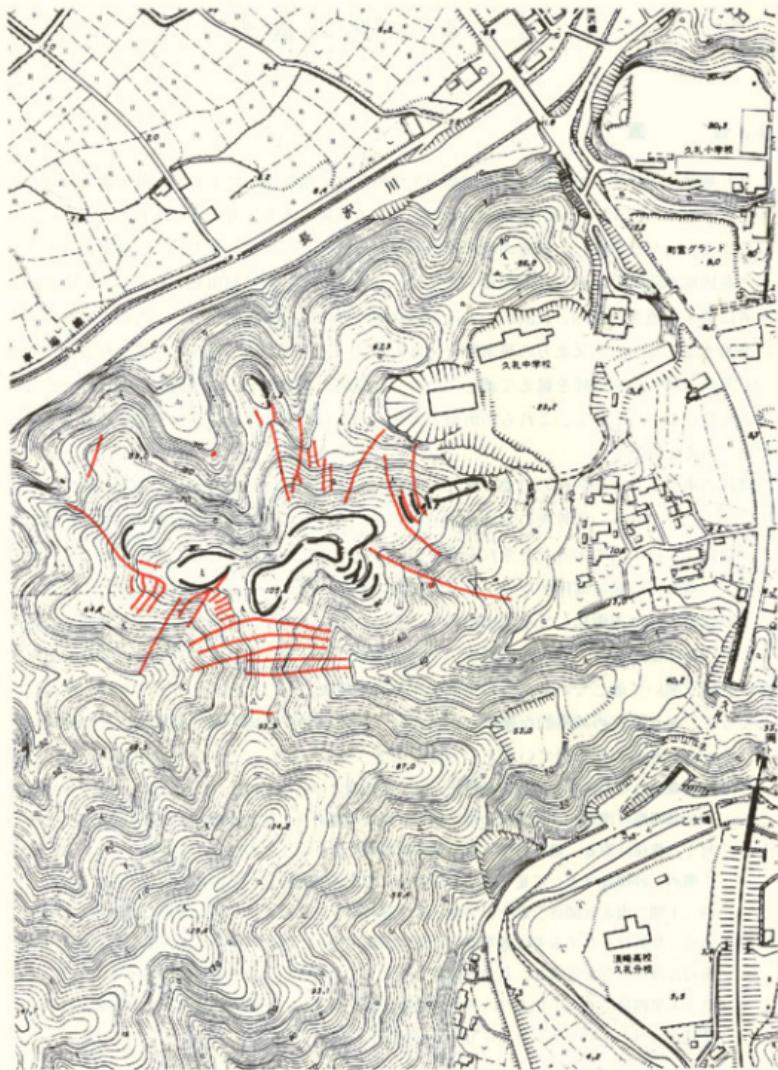


図2 久礼城跡概要図

— 土壘状造構  
— 堀切、堅堀状造構

尾根の東山麓を「町」、「町」の北に接する長沢川沿いを「中村」とよび、「町」には36軒の屋敷と十王堂、素師堂があつて町並を形成しており、「中村」には30軒の屋敷と海宝庵があつた。「中村」の屋敷は「町」のように町並を形成していたわけではないが、なかに市ヤシキが含まれている。

久礼城跡のある城山は、西方からびる山並の東端に位置するが、この山並をはさんで北側に長沢川、南側に大坂川が流れる。大坂川は城山からは距離があるが、麓の土居は尾根一つへだてて大坂川が流れているだけに、自然の防禦の役割をはたしている。

## II、由 来

久礼城の築城年代は不明である。城主の佐竹氏の来住は鎌倉時代も後期のことと思われる。即ち、「大日本史料」第四編之十六所収の「土佐国諸氏系図」後藤氏系図の基之の項に「遠江守、宇治ヲ逃出、佐竹信濃守ト同道ニテ土佐ニ赴、高岡郡久礼ニ著、暫此地ニ居ルト云トモ不安居浪々」とあるのが正しければ、承久の乱(1221)の際佐竹信濃守なる者が後藤基之と共に久礼に来住したことになるが、確たる証拠があるわけではない。史料に佐竹氏の名があらわれるのは14世紀なかばのことと、「土佐国壹簡集拾遺」に次の三通の文書がみえる。

(金か)  
1、近日所: 発向大高坂城也津野三宮佐竹人: 相共率一族等可被防後攻凶徒等之状如件

暦応二年十一月廿四日 権律師(花押)

方田又三郎殿

2、堅田小三郎経貞申軍患事去年<sup>暦応</sup>十二月三日奉届于御手控寄大高坂城於西大手撃向矢倉連日致軍患之處今月廿四日爲被城後攻凶徒 花園宮新田總打入道般金澤左近將監土左權守近藤四郎左衛門尉和食孫四郎有井又三郎河間左衛門二郎佐河四郎左衛門入道賀野又太郎入道大野中村主庄官以下凶徒等數千騎寄來陣取于瀬江山之間同廿五日奉届御手致散: 合戦數十人誅化之時近藤四郎左衛門尉若党浅野孫九郎部分取仕畢此等次第吉良中務尉佐竹一族<sup>修</sup>郎殿見知之上者爲後證可賜御證判候哉以此旨可有御披露候恐惶謹言

暦応三年正月廿八日 佐伯経貞上(裏花押)

進上 御奉行府

承了(花押)

3、明日三日可相攻佐河四郎左衛門入道城也津野三宮佐竹人: 与致同心合力且率一族且可被捕戰功之状如件

康永二季九月二日 僚(花押)

方田又三郎殿

これらの文書は、現須崎市新莊の岡本城によつた佐伯氏(堅田氏)に関する文書で、佐伯文書とよばれもの一部であるが、これらの文書によれば、南北朝時代佐竹氏は高岡郡津野莊の津野氏らと共に北朝方にあって転戦したことがうかがわれる。従つて、佐竹氏の来住が承久の乱の後であるかどうかはともかく、少なくとも鎌倉時代後期には久礼に居住していたも

のと考えてよからう。戦国時代に入ると佐竹氏は一条氏の配下に入り、その勢力は南方の上賀江、西方床鍋、北方の安和に及び、一条氏の重臣として東方の守りにあたった。『元親記』は「久礼信濃守は一条殿の老なり」とし、『土佐軍記』は「一条家の侍佐竹信濃守」と記している。しかし、元亀2年（1571）長岡郡岡豈城に拠って勢力をのばした長宗我部元親の軍門に降り、以後その配下にあって各地に転戦する。この間、久礼城築城のことはもちろん、久礼城に関する資料は全くなく、又久礼城での合戦もない。

近世に入ると二、三の記録をみることができるので、以下それらを挙げておこう。

1、『上佐州郡志』

城跡

高二町余西連山北帶川東有若南有田相伝佐竹氏築以為本城

皇城

東北平地西連 城南有水田此亦佐竹氏所築名曰中城

畠城

東連中城西連本城南沃田北川流爲佐竹氏之舊名曰下城

2、谷真潮「西浦廻見日記」（安永7年＝1778）

（上略）夜に入所の医師寺田某求りかたる久礼古城を芋うねといふ佐竹氏居る山上平原となれる所也町余有そこに九尺四方程の池有木の葉落て浅きかことし三間の竹をさして試るに底にとゝかす城のへいも少々残り矢さまのかたちなとも見ゆ馬せの場といふ所も有こそて陶器など拾ひ得て歸れば家内ひかりてあやしき事しなといひておそる、よし（下略）

3、『堂社御改指出牒 高岡西郡久礼邑』（天保7年＝1836）

久礼村之内大坂谷長沢谷境之森土巒之上

一古城跡毫ヶ所 本城

但佐竹信濃守義直同嫡子兵部少輔親辰迄之居城也其元祖玄蕃頃義辰同掃部少輔義之之武代者右ニ相記北村西山と申所古城跡有リ今申伝ニ北村玄蕃領殿之城跡と言是地名ヲ昭姓名ニ仕ルものと相見申ト既ニ高野山円満院（佐竹家位牌上ケ有之写見合申所右玄蕃掃部之向者於北村ニ附死と御座ル併古城

外ニ

出城跡武ヶ所

中ノ城今大庄屋中村清平扣家懸林西ノ森ニ平地堀切之場所有之清平祖父伝右衛門代家懸林之中ニ而土ヲ取朴節地中ト魯ヲ堀出ス則佐竹家定紋五本青筋形有之朴井ニ古木ニ射込有之朴以前之根等御座朴而是も清平方所持仕朴尤年曆相知不申候

下ノ城今寺田丑治住居屋式南森ニ同断平地堀切之場所御座朴則右山ノ下タホノキヲ下ノ城と本田御矢合塵写相見ヘ申ル

同村之内大坂谷ホノキ本土居と有

一土居屋式空ヶ所

但天正年中長曾我部家より御検地有之佐竹家久礼村ニ居住之跡者安和村も久礼村之内ニ而御古土居屋式之検地ホノキ附等安和村御矢倉牒写ニ相見へ申付に今旧例之残り  
ト義ハ乍始八朔未年祝品安和村地中久礼村大庄屋勤来申ト

### III、城構え

久礼城跡は山頂の詰ノ段と東方下の二ノ段、西方下の三ノ段を中心に、北方下長沢川に向つてのびる尾根の先端部の郭、詰ノ段西南部下の尾根から三ノ段にかけての堀切、縦堀群、詰ノ段東南下の土塁群、二ノ段東下の尾根の土塁群とこの尾根から詰ノ段北方下の郭にかけての縦堀群からなり、南北山麓近くに湧水をたたえる池が一ヵ所ずつある。

詰ノ段は中折れの矩形を呈する平坦地で、長さ約70m、最大幅21m余、周間に土塁をめぐらしており、東にいくほど土塁の保存状態はよくない。土塁の幅は2~3mで、東北端から20m付近にある土塁の切れ目までの高さは0.70m前後だが、西南にいくほど高くなり、西南部では2mから3mを越すほどの高さになる。土塁内側には隨所に石積みがみられ、南北の土塁の切れ目付近の石積み、殊に北側のそれは丁寧である。北側の切れ目からは急な石段が下方に伸びるが、土塁内側の石積みや石段の構成からすると、後述のように石段降り口に門を構えていたものの如く、多分追手にあたるであろう。石段は西方下に降り、下方で東下方に折れて、詰ノ段にそって東南にのびる狭長な平坦地に達する。北側には幅1.3m余のくずれた土塁があり、東方で1mほどの落差をもって二ノ段につながっており、東西の長さは40m、幅5~9mを計る。南側の土塁の切れ目は櫛手にあたるものと思われ、石段が10mほど下方にのび（現在はくずれており、北側の石段に比して簡素である）、石段下から通路が二ノ段に達する。

詰ノ段内部は、西南の部分が一段高くなってしまい、詰ノ段の他の部分より1.50~1.60mほどの高低差がある。幅は北側で4m、中央部から南側にかけて7~8mであり、外側をとりまく土塁も一段と高くなっている。又土塁の切れ目の内側には井戸がある。自然岩盤を利用し、石積みをもって補ったつくりで、降雨時には水をたたえる。天水井戸であろう。

二ノ段は詰ノ段下で幅約26m、東端部で幅約12m、詰ノ段下から東端まで約39mあり、詰ノ段同様土塁がめぐらされ、一部を除いてよく残っている。土塁の幅は1.70~1.90m、高さは低いところで0.70m、高いところで1m余である。土塁の内側は、詰ノ段同様石積みがなされているが、詰ノ段の土塁と違うところは、土塁上外側に幅0.50m、高さ0.25m余の石積み—長方形の小さな石を両脇に並べ、その間に土をつめる一がなされている点である。このような石積みは、詰ノ段から二ノ段にいたる石段及び通路の外側にもほどこされており、更に後述の二ノ段から三ノ段にいたる石段と通路（そのほとんどは崩壊している）、二ノ段西北方の郭のとりつきまでの通路、三ノ段西方下の通路、詰ノ段東南下方の池付近の通路にもみられるもので、幅、高さ共に二ノ段の石積みと同じであって、規格性がみられる。二ノ段内部は、詰ノ段下から東端へ12.80m及び27.80mの地点にそれぞれ小さな石垣が南北に築かれているため、東端に

いくに従って低くなっている。二ノ段には第二次大戦中軍の施設があったといわれ、詰ノ段寄りの石垣もそのため北側が崩され、付近の土塁も一部壊されている。なお、現在北側の土塁の一部に切れたところがあるが、この切れ目は登攀のための道をつけた際切斷されたものであり、もとは土塁がつながっていたものである。

詰ノ段から二ノ段西方に降りてきた石段は、西に折れて下方に降る。この部分の石段は簡素なものであるが、この石段を降りると道は西方の二ノ段に伸びると、逆に東北に伸びて詰ノ段北方下方の尾根上にある郭に通ずるものがある。石段下から三ノ段まで43m、三ノ段の幅は東側で19m、西側で26mあり、東西の長さは最長46mを計る。西方の土塁は削りとられているが、他の部分には土塁がめぐらされている。詰ノ段下は2~3mの通路をへだてて幅2m、高さ1mの土塁があり、北方から2.30mの地点で1.50mの切れ目がある。三ノ段への出入口である。南側の土塁は幅約5m、高さは4~5mにも及び、二段にしつらえられている。北側の土塁は不整形で、ほぼ2~3m幅の土塁の内側にニカ所つき出した部分がある。土塁そのものは、二ノ段のそれと同じである。又南側の土塁の下、東方から24mほどの地点に東西4.40~4.80m、南北6.20m、高さ1m余のつき出した部分があり、北側のそれとともに検討の要があろう。

詰ノ段東南角下方には5~6mの落差をもつ土塁が、4段にわたって築かれている。一番上の土塁は、詰ノ段から二ノ段に通する道に沿ってつくられている。幅2~3m、高さは最も高いところで3m、長さ16m。土塁上外側寄りに二ノ段土塁上の石積みほど丁寧ではないが、やはり幅0.50m、高さ0.20~0.30mの石積みがあり、土塁の切れ目から二ノ段寄りの通路の外側にも断続的に同様の石積みがある。この土塁の下5m余に断続する土塁がある。西方の土塁は最大幅2.50m、長さ7.30mで、東端で1.40mの高さを有するが、西方に行くほど高さを減じる。この土塁と3.30mの間隔で東へのびる土塁は、幅1.70m、高さ1.70mで6.30m続くが、その西端から西南下方へ斜に9mほど下降し、5.40mの落差をもって南下方に築かれた土塁の内側に達している。この土塁の東端から4mへだてて幅2m、高さ1.70m、長さ2.70mの土塁が残存しているが、この土塁は西の土塁とつながっていたものと思われる。以上の土塁の下方には、西端で幅1m、高さ1m、東に行くほど幅と高さを増し、幅3m、高さ1.60mの土塁が22mにわたって構築されている。そして東端で4.20m土塁が切れたのち、二ノ段下の通路に向って17.30mにわたって土塁が残っている。この土塁の残存状態は悪く、ほとんど崩れている。その幅1.20~1.30m、高さ0.30m。以上三段にわたる土塁の下方に、いま一段の土塁が構築されているが未測定である。

詰ノ段東南角下方の4段にわたって土塁が構築された緩やかな尾根と、二ノ段東方下の尾根との間には幅5m、深さ1mの豊堀が下方にのびるが、山麓までのほぼ中間地点にはこの豊堀に接して湧水池がある。湧水池へは尾根伝いに通路があったようで、湧水池へ降りる道が湧水池から上方へ10m余残っており、外側には幅0.50m、高さ0.30mの二ノ段土塁上の石積みと同じ石積みがほどこされている。

二ノ段東方下には、尾根に土壘群がある。二ノ段下10m余のところに南北にのびる土壘がある。直下の土壘は長さ19m、幅5m余で、二ノ段下の斜面と土壘の間から堅堀が尾根の両側の斜面下方にのびる。この土壘と1mほどの間隔で幅6.60m、高さ4m、長さ13.30mの第2の土壘が並行し、更に下方に幅6m、高さ3m、長さ8.90mの第3の土壘が並行して構築されている。第2と第3の土壘の間から北方下にかけて堅堀がのびる。第3の土壘の両端からは、東方下にむかって尾根に二つの土壘がのびている。南側の土壘は上方で4.70m、下方で3.90mの幅をもち、上方で高さ1.20m、下方の高さ0.40~0.50mであり、長さは15.20mである。北側の土壘は狭いところで幅2.40m、広いところで幅3.60mで、高さは0.60~0.70mである。この土壘は、第3の土壘から下方へ17.60mの地点で緩いカーブを描いて南折し、南側の土壘の先端から3.90mのところを4.30m南にのびている。北側の土壘は一部をのぞいて内側に石積みがなされ、南折した部分の石積みはよく残っているが、この部分は長さ4.30m、幅3.30mの長方形をなし、上部は平坦であって何かの施設があったのではないかと思われる。

詰ノ段北方下の長沢川にむかって突き出した小さな尾根の先端部に小さな郭があることはすでに述べたが、この郭へは尾根上を幅2.20m深さ1.50~1.60mの堅堀がのびており、郭に近いところで堅堀は2つに分かれる。郭は南北20m、東西10mほどで、東側が土壘状となっている。ここから西南に降ると小さな谷の奥に湧水池がある。この湧水池は、先述の南側の湧水池よりやや大きく、位置も低い。郭のある尾根と二ノ段東方下の尾根との間に、一段低く幅広い尾根があり、長沢川に沿って東にのびるが、この尾根上に幅3.40m、深さ1.00mと幅5.50m、深さ1.50~1.60mの2本の堅堀があり、この尾根と二ノ段東方下の尾根との間には先述の2本の堅堀のほかに幅4.20m、深さ1.00mの長い堅堀が下降する。又この尾根と郭のある尾根との間にも谷に向って下降する3本の堅堀がある。東から幅4.20m、深さ1.60~2.00m、幅6.00m、深さ2m余、幅6.00m、深さ2m余。西端の堅堀が最も長く、谷に連続している。

大小さまざまの堅堀が走るのは、詰ノ段西方下と三ノ段下である。詰ノ段西方下には幅2.40~3.30mの浅い堅堀が5本あり、三ノ段と詰ノ段下の通路は三ノ段下を西南下方にのび幅4.00mの堅堀となり、その西にも幅3.50mの浅い堅堀がある。三ノ段西方下の尾根には4本の堀切があり、上から幅2.00m、深さ3.00m、幅5.00m、深さ1.60m、深さ3.00m、深さ1.00m、幅2.00m、深さ1.00m。この堀切と三ノ段下からのびる堅堀との間には2本の堅堀があり、尾根寄りが幅2.50m、その東の堅堀が幅3.50mで、ともに深さ1m足らずのものである。そして尾根寄りの堅堀が6mほど下降したところに、さながら土壘に似た盛り土があり、ここから西方下に向って道がのびる。道の外側には幅0.50m、高さ0.20~0.30mの二ノ段土壘上外側にある石積みと同じ石積みが設けられており、石積みの内側は2.50mほどの幅をもっている。この通路の下方は未調査である。三ノ段下の前記の4本の堀切はその北の尾根との間のくぼみを下降する堅堀につながり、この堅堀の下端北の尾根の先端には、幅2.00m、深さ1.00mの堀切がある。又三ノ段の西北方下20mほどのところに、堅堀にそって土壘がつくられ、土壘は堅堀と分かれ

て下降気味に北東に走る。幅1.80m、高さ0.50m、土壘の内側の幅は3.50mである。この土壘の上にも小さな堅堀が1つある。

最後に詰ノ段西南端下の堀切について述べる。この堀切は、南にのびる尾根からの攻撃に備えたものであることはいうまでもない。堀切は大小6本認められる。詰ノ段下から南へ述べよう。詰ノ段直下のものは幅6.00m、深さ2.00m、第2の堀切との間は2.00mで、第2の堀切は幅4.00m、深さ2.00m。第2の堀切と第3の堀切の間隔は6.50mで、第3の堀切は幅3.60、深さ1.00m。以上の3本の堀切は、それぞれ尾根の両側へ堅堀となって下降する。第3の堀切から7.00mのところに第4の堀切がある。幅5.00m、深さ2.00。第4の堀切から6.50mで第5の堀切がある。その幅3.50m、深さ2.50m。この2本の堀切は東方のみ堅堀となって下降する。第5の堀から南方へ12mのところに第6の堀切があり、その幅3.00m、深さ1.00mで、尾根はこの堀切を越えると上昇する。

## 第2章 調査の概要

発掘調査は標高 103.5m の久礼城跡の詰部分約1400m<sup>2</sup>を対象とし、特に遺構の残存が予想される東端部と、西端佐竹神社の裏手に1.5~1.6mの高さをもつ平坦部を発掘調査し、井戸と伝承されている土塙状遺構、追手部分の土塁及び門構え、掻手部分の土塁構築法などの確認調査を実施した。この結果東端発掘区からは、8間×4間の礎石をもつ建造物跡とそれに接して2間×2間の礎石建造物跡を発掘した。また西端発掘区からは6間×2間の礎石をもつ建造物跡を発掘した。その他各地点の確認調査においても、それぞれの遺構の構築法や構造の調査において多くの貴重な資料を得ることができた。

### I、遺構

#### 1 砕石建物跡 SB-01

詰東端の雄木の生えた平坦部である。周囲をめぐる土塁は旧軍隊によって一部破壊されてしまい、眼下には久礼湾、市街地が一望でき本城では最も眺望のよい地点である。

調査はこの地点に10m×5mの発掘区を任意に設定し実施した。この結果礎石群を確認したため、一部発掘区を拡大し最終的には10×6mの60m<sup>2</sup>の発掘面積となった。

調査は将来の保存をも考慮にいれ、礎石下の根石の状況や掘り方までの調査は実施せず、礎石の上面を露出させ建造物の規模を明らかにするにとどめた。

遺構は本城の詰を構成する黄褐色土の上面において確認された。規模は8間×4間の南北棟の建物である。

礎石はすべて腐葉土の現地表下20~30cmで検出された。石質は砂岩と硅岩で最も大きいものは1.5m×0.7mのものがあった。これらの礎石は上面は平坦となった自然石や、一部削石を利用しておらず、24個の主礎石とその間に多数の小礎石が散在している。配列は規律的に配され、そのほとんどが原位置を保っていると考えられる。

柱間寸法を礎石の中心で計測すると、桁行A列の礎石間隔は1m(3.3尺)、但し4~5間・8~9間が0.75(2.5尺)とやや狭くなっている。検出状況や他の礎石との関連からして礎石の移動は考えられず、すべて意識的な設定のままである。

E列については、検出状況からは1~4、7~9について移動は考えられないが5、6については浮き上っており、8についても若干の移動が考えられる。従って柱間間隔も2~3~4~5、8~9が1m(3尺)であるが1~2、7~8間が0.75m(2.5尺)と狭い。また移動が考えられる5~6~7間についても1m(3尺)であり浮き上ってはいてもほとんど原位置からの移動はなさそうである。

梁行1列は1m(3尺)各に整然と配列され、すべてが原位置のままである。

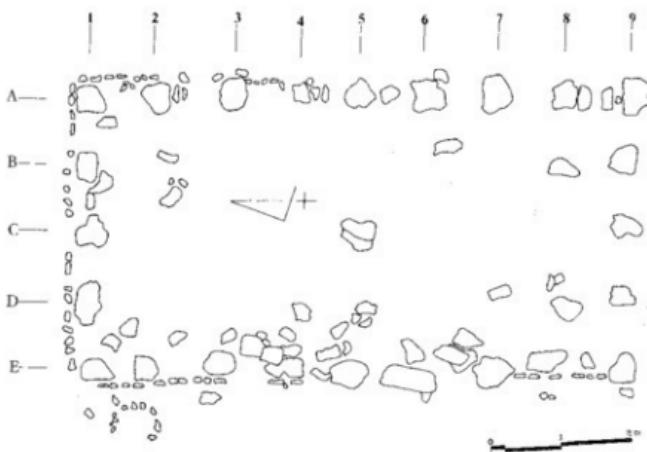


図3 SB-01実測図

中央部C-5に1個の礎石と、D-5に礎石を除去したあとの根石状遺構が存在する。C-5礎石は割れてはいるが、A-5およびE-5礎石からは各々2m(6尺)、C-1、C-9の礎石からは3.7m(12尺)とSB-01の中央部の礎石として完全である。またD-5の根石状遺構もC-5及びE-5からは1m(3尺)D-1からは3.7m(12尺)を測り礎石の位置としては適当な位置を占めている。

8列のB・D地点にも礎石が所在する。この2礎石も検出状況からすれば原位置を保っているものと考えられるが、B-9およびD-9の礎石に対してはやや西に振っている。間隔はA-9よりは1m(3尺)B-9よりは0.75m(2.5尺)D-8についてはE-8の移動も考えられ測定しがたいがD-9よりは0.75m(2.5尺)を測り、B-8との間隔は2m(6.5尺)である。

最南列の9列もすべて1m(3尺)間隔で5個の礎石が整然と原位置を保っている。

以上の測定値からSB-01の建造物の柱間間隔は若干異なるところもあるが桁行7.7m(25尺)×梁間4m(13尺)の建造物の礎石とすることができる。

またこれらの主礎石に対して小礎石が各所に散在する。特に西北部分の主礎石の内側に集中している。これらのなかには、主礎石と同様間隔を保つものや、上面が扁平で礎石として不足ないものも存在する。これらの小礎石が、側柱のものか束柱のものか、あるいは間柱のものかは現時点での判断は困難ではあるが、いずれにしてもSB-01の建造物のなかで何らかの機能を果した補助的礎石とすべきものに間違いなかろう。

礎石に接して削石を立て配列した石列を発掘した。東礎石A列についてはA-4礎石から北に3.5m、A-1礎石を巻くように西に折れE-1礎石に至る。そこから南にE-4礎石まで

3 m 続く、E—3、E—4 碓石間およびE—4～E—7 碓石までは損失しているが、E—7 からE—9 碓石については配列されている。南端9列礎石部分及びA—5～A—9 碓石間についてはこの石列が検出されず、意識的に精査したが確認することはできなかった。E—5～E—7 碓石周辺は擾乱の地点であり、擾乱時点での破損を考えねばなるまい。この割石列の性格については、E—1、E—2 碓石間において25～30cmの間隔をもって外側に並列されたものが、E—2 碓石地点で西にまわっていることなどからSB—01に伴う雨落し溝か排水用の溝と考えることができるのでなかろうか。

## 2 碓石建物跡 SB—02

追手門から土塀掘部の腰巻石積みを確認調査するなかで、土塀掘部に接して礎石状の上面が平坦な石を発掘した。従ってその石を中心に発掘区を拡大して調査を実施した。その結果SB—01の西方4mの地点で礎石の南北方向はSB—01に平行する2間×2間の礎石建造物跡を確認した。礎石状の平坦な石は周辺に9コほど存在したが、建造物として規格性を考えることのできるものは5個で、桁行、梁間ともに2間の建造物と考えができる。ただ建造物の西と南の礎石は損失しているが、礎石の形状や規模はSB—01と同様で、礎石の外に削石を立てた石列の存在することも同様である。柱間寸法は礎石の中心部で計測して2m(6尺)ですべて規則正しく同間隔で原位置を保っている。



図4 SB—02実測図

### 3 磐石建物跡 SB-03

該部分の西端に佐竹神社が所在するが、その社に接して1.8~2.0mの比高でおよそ100mの高まった地点がある。この地点は本城跡のなかでは土壘も最も高く、追手部西周辺の土壘に比して約5m高く、調査予定地との比高も2~3mである。特に西南部分が高く、そこから東および北へは漸次下って行き、東北隅では平坦部との比高は約1.0mとなる。しかし土壘外側はすべて切りおとしによる断崖となっている。平坦部の現状は雑木林で、土壘の盛土も相当量の流入が予想された。しかし土壘からの流土は土壘裾部に若干確認されたのみで、雑木の根と腐葉土20~30cmを除去すると、詰部同様の黄褐色土となり、その上面に6間×2間の南北棟の磐石建造物を発掘した。この地点についても将来の保存を考慮し、SB-01と同様の調査方法をとった。

磐石群は平坦部一杯の占地状況を呈し、佐竹神社の裏などは岸の先端部にからうして磐石が残存し、南、西の土壘側については土壘裾部を掘りこむように磐石が発掘された。この検出状況からして、この建造物が機能した時期は、この一段高い平坦部は今よりは少し余裕のある広がりを考えるのが妥当ではなかろうか。

磐石は若干の割り石の他そのほとんどが河原石で、上面は平坦で径30~40cmの大円、橢円形の整った磐石である。

柱間寸法を磐石の中心で計測すると

A-1~A-2	C-1~C-2間	1.5m (約5尺)
A-2~A-3	C-2~C-3間	1.8m (約6尺)

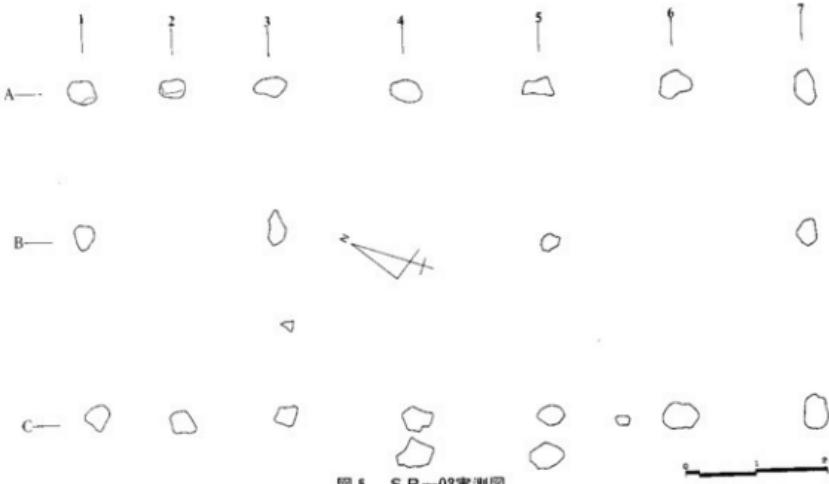


図5 SB-03実測図

A—3～A—4	C—3～C—4 間	2.4m (約7尺)
A—4～A—5	C—4～C—5 間	2.3m (約7尺)
A—5～A—6	C—5～C—6 間	2.4m (約7尺)
A—6～A—7	C—6～C—7 間	2.3m (約7尺)

を測り、A—1～A—2 間がやや狭く 1.5m (5 尺) 次いで A—2～A—3 間が 1.8m (6 尺) で他は 2.3～4 m (7 尺) 間隔とすべきであろう。

また

A—1～B—1	A—7～B—7 間	2.5m (7 尺 5 寸)
B—1～C—1	B—7～C—7 間	3.0m (9 尺)

を測る。

以上の計測値から S B—03 の建造物の柱間は一定しないが、桁行 13m (43 尺 = 7 間) × 梁行 5.8m (19 尺 = 3 間) の建造物とすべきであろう。

B—3、B—5 地点には、他の礎石に比し若干見劣りのする割石の礎石を配し、C—4、C—5 についてもその西に 70cm (2 尺 5 寸) の間隔で添柱用の礎石も配している。

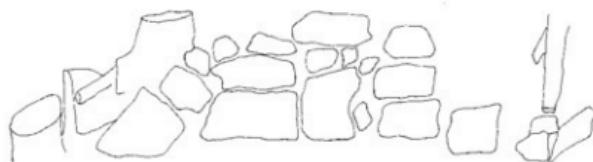
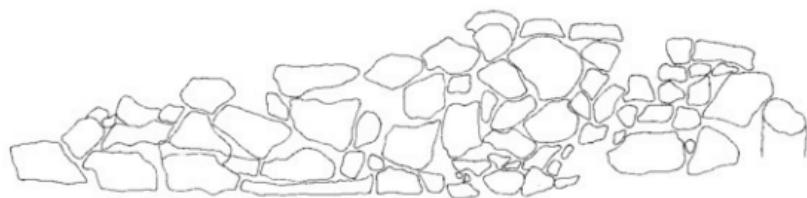
#### 4 追手部周辺の確認調査

この周辺は城跡の遺構として残存状況が良好な個所であり、将来の保存を考慮して、遺構の現況を把握確認することのみを調査の目的とした。そのため周辺に堆積した腐葉土や流土を除去し調査終了後は再び除去したもので遺構を覆いもとに復元して保存をはかった。

##### ① 西側土壘

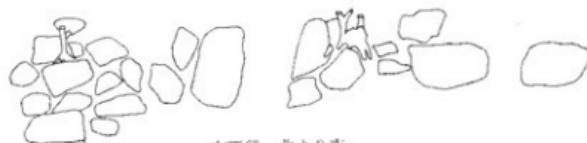
追手門西側土壘は残存状況が最も良好な地点である。土壘には径 15cm の雑木も生えてはいるが、カマボコ状に盛り上げられた土壘は、腐葉土と表面に散在する人頭大の割石などで形成され、原状を保っているものと考えられる。西方から詰部の北土壘として東へのびてくる土壘は、追手門の所在する現位置で一旦切れる。土壘の裾部には追手門部からおよそ 3.7m 西方へ腰巻石垣が積まれ、その石垣の切れるところからほとんど直角に北に折れている。この腰巻石垣の石は城跡の地山を形成する砂岩で追手門部が最も高く 70cm、西端は 40cm 内外とやや低くなる。腰巻石垣の中央部分は若干土壘側に弓なりに湾曲させ、土壘が北に折れる隅部には大石を配して土流防止と強化をはかっている。この石積みは大きさも大小さまざままで一見すると比較的雄然と積まれたようにみえるが、最下部の一段目には比較的薄く平坦な石を配し、次いで二段目と規則的に積まれ、中段部にはやや大き目の石、そして上部には比較的小さい石を配している。また表面には極力平坦な面が露呈するよう工夫されているなど全般的には規格性をもった構築法といるべきものであろう。

腰巻石垣の西端部ではば直角に北に折れた土壘は、そこからおよそ 3 m 北に入り、再び直角に折れて詰の北部を構成する土壘となっている。北に折れた 3 m 区間の裾部には腰巻石垣はな

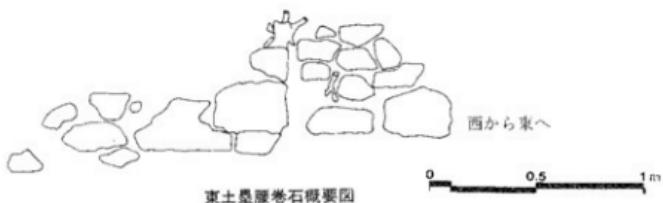


右 南より北

西土壌巻石概要図



左下段 北より南



東土壌巻石概要図

図 6 西土壌・東土壌巻石概要図

く、拳大から人頭大の石と黄褐色土を混合して土壘の基部をつき堅めた構築法でその上部にカマボコ状の土盛りをかまえた比較的柔らかい土盛土壘と言わざるを得ない。

追手門部については約2.8mにわたって石積みがある。一部雑木の根張りによって破壊はされているが、比較的平均した大石を配し、高さ50~60cmを測ることができる。

### (2) 東側土壘

西側土壘に比して残存状況はやや損ねているが、詰との比高1.0~1.2mのカマボコ状土壘としての景観は保っている。西側土壘同様裾部に腰巻石垣を伴い、追手門部については長さ2.6m、高さ50cmの石積みを残す。しかし原位置を保っていると思われるものは下方2段約20cm内外で、他は若干の移動を考えねばなるまい。また東にのびる土壘の裾部にもかつては腰巻石垣は存在したであろうが、現在では約1.5mにわたって所在する平坦な2~3個の大石の他は原位置を保つ石とは考えられない。現在土壘上や周辺に散在する石はあるいはこの部分の腰巻石垣の石であるかも知れない。この石積みの破壊による盛り土の流失のためか土壘そのものも西側土壘に比してやや低い。

### (3) 追手門部

詰北部を形成する土壘を区切り、そこに追手門を形成する。門幅2m(1間)で詰部より約1.5mの平坦な面を北にのばし、そこに2段の石段を構える。そこからは急傾斜の石段で下方二段へ降りる。

平坦部の2段の石段のうち、上段は幅1.8m(1間)の間に、上面と側面(北側にあたる部分)に平坦な面を露呈させた6個の石を配している。各石の上面積はまちまちであるが、直線に整えられた側面は、厚さ10cm内外の石に統一され次の段につないでいる。

またこの石段石列と東側土壘との接点には、土壘側に約30cmの大石を2個配し、この2個でもって四角の2面をはさみおさえる形で立て、その下部には、門柱及びそれに付属する柱の礎石とも考えられる石を構えている。上面は平坦な石で15×20cm大の石を3個水平に並べている。特に3個のうち中央の石は形が整い、主柱の礎石で他の2個はその側柱の礎石として利用し、上壘側の2個の大石はこれらの柱を側面からおさえるためのものと考えることができるのでなかろうか。ただ反対側の西側土壘の接点部が石段石列が1個分損失しており東側土壘にみるような遺構が全くないところから門柱の存在を断定することはできない。ただ土壘側の腰巻石垣のなかに東側土壘の接点部において認められたと同様の大石が1個立てられた形で存在することは、西側にも東側同様の遺構の存在を考える可能性もあるようである。

この段からおよそ1.4mの間隔をおいて2段目の石列がある。上段との比高は10~15cmで現存する石は5個である。上段に比し長方形の石を使用しているが形態等は上段よりは劣っている。ただ上面と側面の平坦面は巧みにそれを利用し、側面高は10cm内外を測ることなどは上段と同様である。

ここから二の段への道は急傾斜で約13.0m、現有幅1.0~1.2mである。この傾斜面にもかつ

では石段が存在したと思われるが現在は荒廃してその一部が残存するのみである。

### 5 土壌状遺構の確認調査（井戸跡と伝承）

追手門から南に3mの地点に、5m×3mの楕円状の窪地がある。現地表面からおよそ50cm程み、数年前には土地の好事家によって発掘され、刀を発掘したとも言われ、地元では井戸跡と伝承されている。

調査はこの窪地内に堆積した腐葉土と流れ込んだ土砂や投棄された石塊を除去して土壌の原形を把握することを目的とした。

発掘された土壌は、上面では北部がやや広く、卵形を呈し、底部は長方形でおおむね平坦である。南北を長軸とし、上面で6m、底部で4m、短軸の東西は北部が2.8m、南部が1.5m、底部は南北ともに1m、深さは約1mの規模である。地表部から底部までは四方から平均した傾斜角で下り完全に岩盤にて囲まれている。発掘前や発掘途中においては、自然岩盤と石積みを併用した井戸かとも推定されたが、石は人工のものでなく流入があるいは投棄されたものであった。従って石組みや木枠など井戸跡に係わる施設は全く検出することができなかった。しかし岩盤は自然の露岩であり、透水性をもたず雨水を集水する溜井には好適の岩質である。ただ集水路等の確認はできず、井戸跡と断定するにはいまひとつ決め手に欠ける土壤である。

### 6 捩手部土壙構築法確認調査

搦手部西側土壙部を5mほど発掘した。この地区も現状確認であり調査終了後は除去した土は再び覆い遺構の保存をはかった。

対象とした土壙は詰部との比高約1.3~1.5mのカマボコ状で南は急傾斜となり、詰部へは約35度の傾斜である。土壙上には雑木が生え、その落葉と腐葉土におおわれ土盛の土をみるとできない。土壙詰部には腐葉土と土壙の流土により相当量の堆土があった。この腐葉土と流土を除去すると、拳大から人頭大の割石が黄褐色土と混ざって露呈した。この割石は風化した灰褐色の砂岩で、城跡の地山を形成する岩質である。これらの割石を積みあげて土壙の基盤を形成していると考えるよりむしろ黄褐色土と石を混合して練り上げたとものとみた方が妥当であろう。それも土壙の内部まで土と石の混合して強固な基盤を造成したのではなく、表面のみの手法であり、決して堅い強固な基盤とは考えられない。この手法で高さ40~50cm内外部分まで積みあげそれより上方はすべて黄褐色の盛り土である。この土は詰部分全域を構成する土質で詰部を削平してその上で土壙土壙を構築したものであろう。盛土部分についても比較的柔らかく盛り上げ、版塗状に堅めた部分など見当らない。

## II、出土遺物

出土した遺物は、量的に少ない。明の染付、土師質土器、鉄釘、古銭であるが、そのうち久

礼城そのものと関係のあるものは、明の染付、土師質土器、そして鉄釘の大きいもの一本であり、小の鉄釘、古錢である寛永通宝は城址に作られた佐竹神社関係のものとみて誤りないと想われる。以下各出土遺物について略述しよう。

### 1 明染付

久礼城址から二点の染付碗の小破片が出土している。細片であるが遺物として貴重なものであるので報告しておこう。

A、 $3 \times 3.5$ センチ大の小破片であるが、明の染付碗と一見して判明することの出来るものである。碗は下胴部から高台にかけての破片で、高台はごく一部が残るに過ぎない。下胴部に芭蕉葉文の下部がみられる。高台の一部が残っているが、それによって高台は低くて小さいものである事がわかる。高台内にも施釉されている事が、この破片で察知することができる。見込の部分にも文様があるようであるが、本碗ではその文様が明確でない。しかし県外のこの種碗の出土例からみて、見込には蓮花文が描かれているとみてよい。SB-01の礎石群を埋めていた土砂より発見されている。

以上、小破片であるが、文様から推して「蓮子碗」（レンツ一碗）の系統のものとみられる。釉は淡い空色を呈す。この種の染付碗について小野正敏氏は15世紀後半～16世紀後半という幅(註)で、その年代を推定されている。

B、SB-03からも $1.7 \times 2.0$ センチ大の染付碗が出土している。小碗の口縁部とみられ、外部口縁部に二本の界線、胴部に太い唐草文が描かれている。内面の口縁部にも二本の界線を持つ。この染付も年代的には1の染付と同様に考えてよかろう。

### 2 土師質土器

SB-01より一点、通称井戸と呼ばれている土壙状遺構内より四点、この土壙東側の平坦地より八点、佐竹神社周辺より細片が四点出土している。ほとんど細片で、器形復元の実測図作製もでき難い程の細片である。

SB-01より出土した土師質土器片は杯の底部片であり、赤褐色の色調をなし、底部の糸切の痕跡が一部残っている。

土壙東側の平坦地出土の土師質土器の破片も、全てが杯とみられる。赤褐色の胎土を持つもので一片を除いて全てが杯胴部の破片である。ただ一片だけ底部片がある。糸切底の糸目が残っている。

井戸と称される土壙状遺構より四片の土師質土器片がある。四片の土師質土器のうち、三片は小破片であって、その器形は詳らかにする事が出来ない。うち一片のみ淡黄色の色調のものがあるが、他は全て赤褐色である。胴部から底部にかけての、やや大形の破片も出土しているが、これは椀形とみられる。底部に近い部分が丸く渦曲しているからである。この丸味のある

部分はロクロ目が内外面にみられる。

佐竹神社周辺部よりも四片の土師質土器が出土している。うち三片は杯の底部とみられ、一つは底部から立ち上った部分、他の二片は底部の円板状の破片である。いま一片は小形の杯の一部であろうか、非常に薄い破片である。この小形の薄いものが淡黄色であるが、他は全て赤褐色のものである。

### 3 鉄釘・古銭

釘と確認できるものが二本出土している。一本は現存の長さ5センチでSB-01より出土している。いま一本は現存長さ3センチで佐竹神社周辺から出土している。二本とも鍛造品で細長い四角錐形に打っている。SB-01より出土した釘は直角近くに折り曲げて作った頭部が折損していない。佐竹神社周辺から出土した釘は、小釘とみられる。3センチの長さの中で張り出した頭部も残ったものである。

佐竹神社の周辺から出土した一枚の寛永通宝である。時期的にみても久礼城址関係の遺物とはみられず、佐竹神社に實銭としてあげたものであろう。

註

小野正敏「15~16世紀の染付磁・皿の分類と年代」貿易陶磁研究二、昭和57年

### 第3章 おわりに

久礼城跡の調査は、城跡の現状把握を目的として一部発掘調査を交えてのものであった。城跡の調査に欠くことのできない実測も、結部分及び二の段について実施することができ、その概要は把握することができた。

城の繩張りについても踏査によって一応概略を把握でき、あとは実測による裏付け作業が残されるのみとなった。踏査によって得られたデータをもとに、三の段や各所にみられる土壘状遺構や塁状遺構の実測も今後の調査の課題となろう。

今回の発掘調査によって得られた出土遺物はきわめて少量であり、その遺物をもとに久礼城の機能した時期の判定は困難である。ただSB-01上面からと、SB-03部分からそれぞれ1片の明の染付が出土した。これが久礼城跡の年代考察の唯一の遺物といえよう。この染付は15世紀後半から16世紀後半という幅で編年されるものである。文献による久礼城の歴史はほとんど不明であり、元亀2年（1571）長宗我部の軍門に降って以来、久礼城に関する資料は全くない。出土した染付はあるいは元親の軍門に降る前後に使用された碗の破片とみるべきものではなかろうか。

次に詰部において発掘された3棟の礎石建造物の性格についてであるが、3棟ともに柱間間隔が異なる建造物である。柱間間隔を異にするのは、各建造物の機能が本質的に異なるためであろう。柱間を狭くしたり、また柱数（礎石数）の多いのは、その柱なり礎石が特別の荷重を負い、それに耐えるためであろう。これらの点も考慮に入れ、またその建造物の位置関係からSB-01は櫓と考えたい。本城跡内では最も眺望の良い地点であり、久礼湾から焼坂峠まで一望できる。望楼的な性格をもつた建造物であろう。櫓であればある程度の高さも要求される。このため柱間隔を狭め柱を多く建てたり、また補強用の補助的柱も必要であり、SB-01のような礎石群となったのではなかろうか。

SB-02については、柱間隔はそれぞれ1間でごく普通の建造物とみることができよう。あるいは城兵たちの詰所、いわゆる本城における管理棟的な性格を考えることのできる建造物ではなかろうか。

SB-03については、結部の最奥部に所在し、土壘も最も堅固な位置を占めている。位置関係からして倉庫的な目的をもった建造物と考えたい。城跡においては倉庫は総柱建物があてられるが、本城の場合は総柱ではないが中央部には2間ごとに礎石が配され、総柱に次ぐ堅固な建築法である。本城の倉庫、多聞に相当する建造物とすべきであろう。

本県における中世城跡の発掘調査はまだその例は少ないが、詰における建造物の位置と性格は各城跡とともに共通している。詰の両端に建造物を配し、中央部分は広場として何の構造物も配さない。おそらく先端部には望楼的な性格の建物を建て、後方には多聞、いわゆる倉庫的な

建物を配し、中央部は城兵たちの集う広場としたのではなかろうか。発掘例の少ないなかでの速断はつしまなければならないが、少なくとも中世城跡誌の現段階までの発掘調査の成果からすれば、以上のように結ぶことができるものではなかろうか。久礼城跡もまたそのパターンにはまる城跡とすべきものであろう。

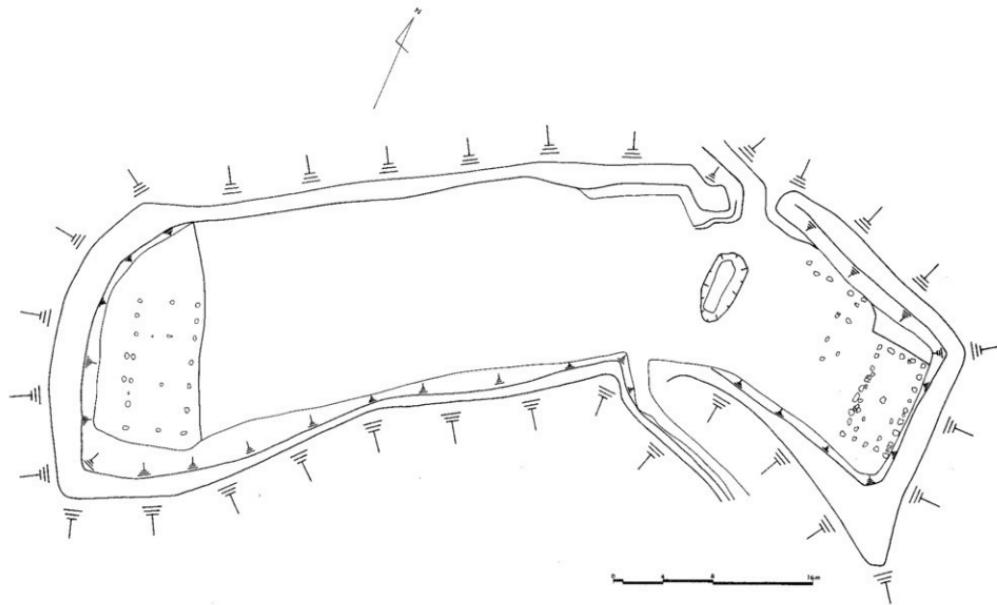


図7 路部分実測図

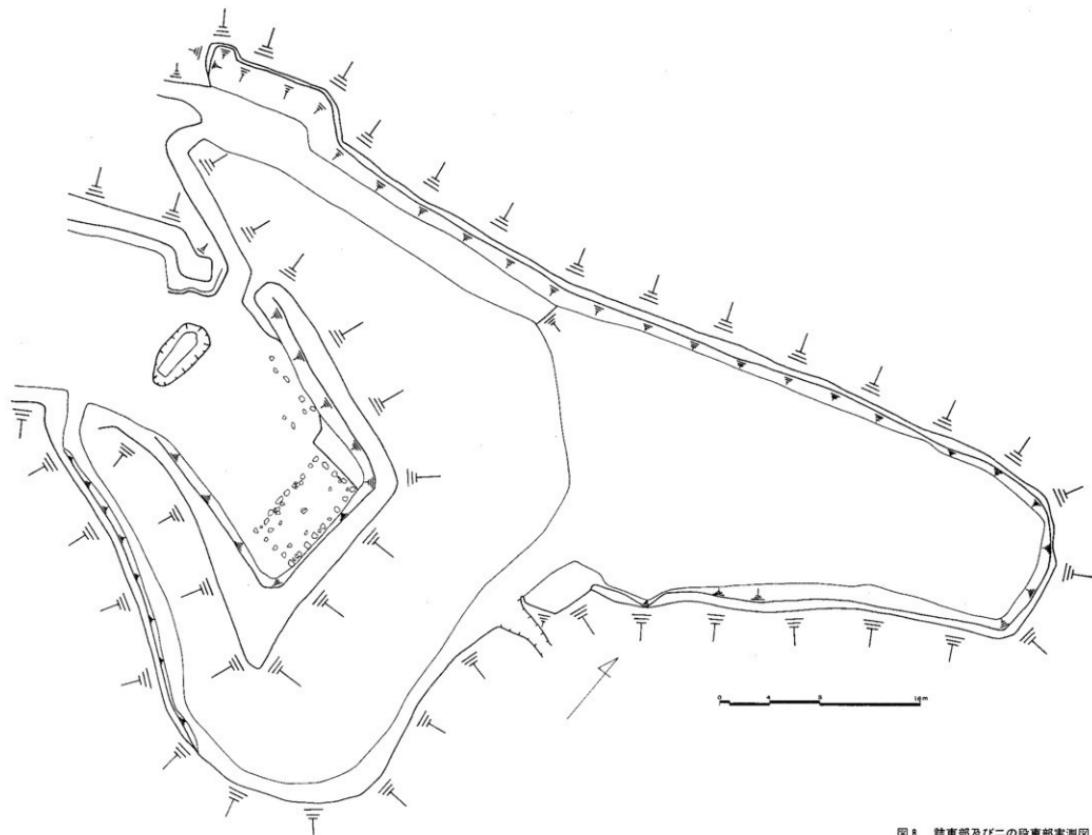


図8 計東部及び二の段東部実測図

# 図 版



久礼城跡 航空写真（中央の学校右上）



久礼城跡 全景（北より）



久礼城跡（東から）



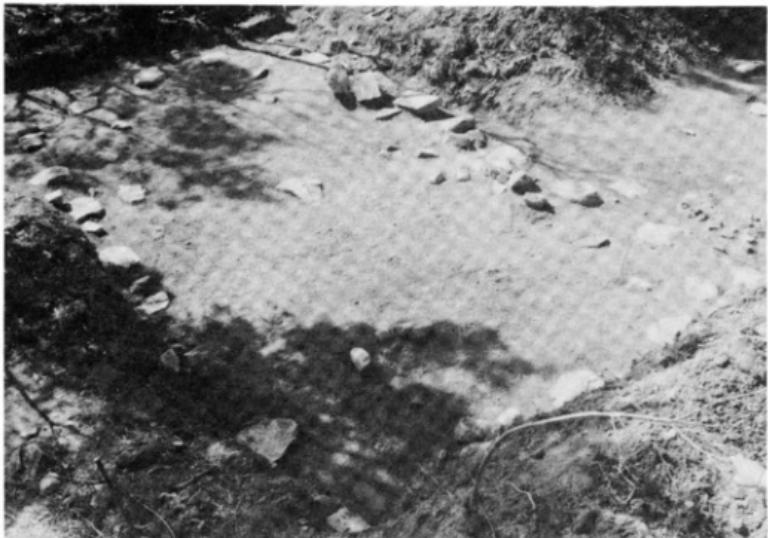
発掘に先だっての祭事



詰 部（東より）



詰 部（西より）



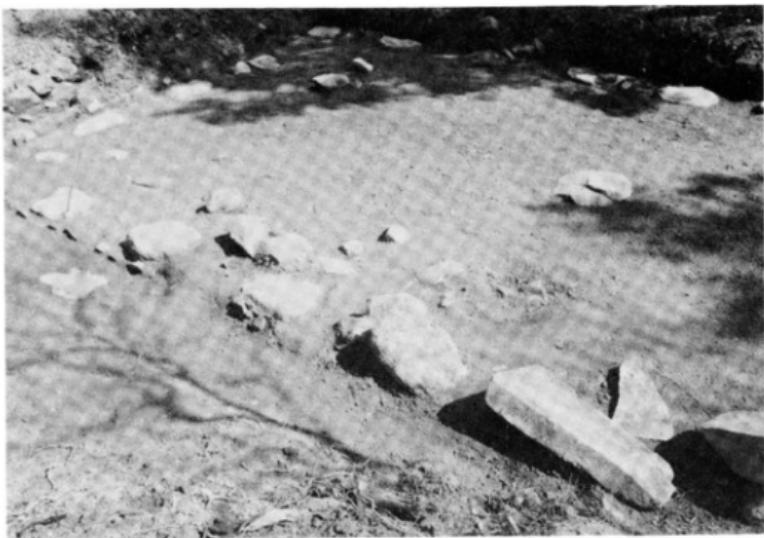
SB-01 完掘状態（東北より）



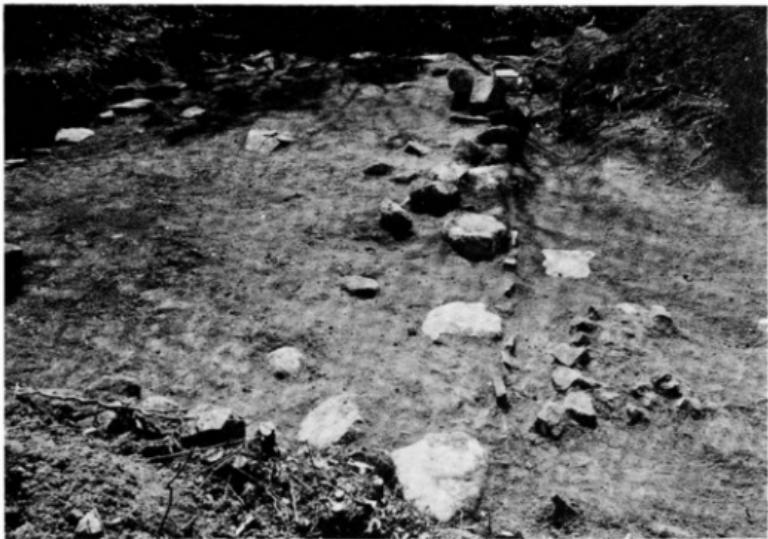
SB-01 完掘状態（西より）



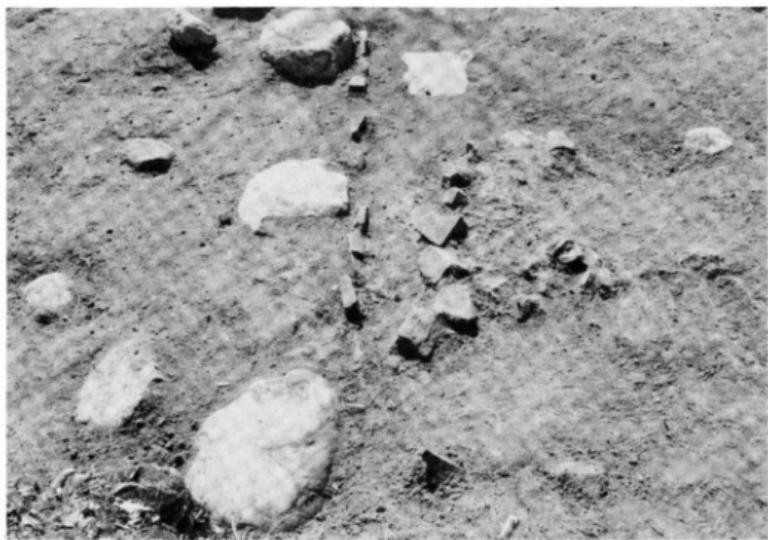
S B—01 A列礫石（北より）



S B—01 E列礫石（南西より）



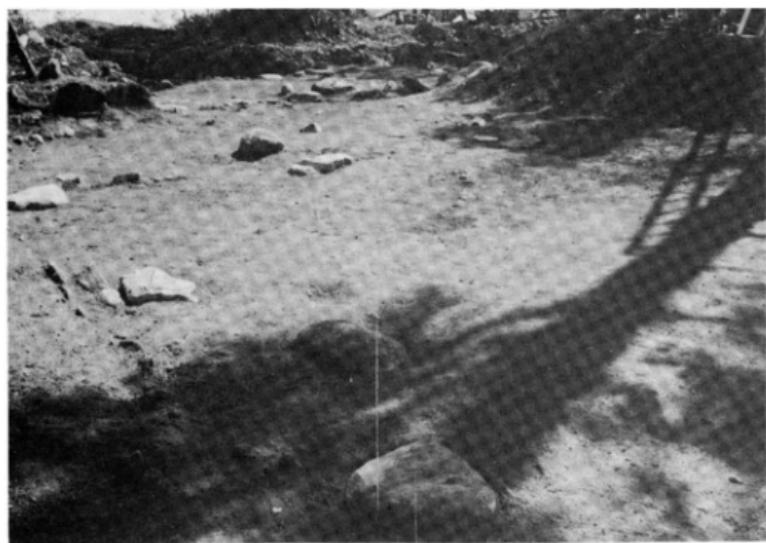
S B-01 E列礫石と雨おとし溝（北より）



S B-01 E列礫石および雨おとし溝（北より）



S B—02 発掘状況



S B—02 完掘状態（北西より）



S B-02 北礎石（西より）



S B-02 東礎石（北より）



佐竹神社裏 SB-03 発掘前



SB-03 発掘前



S B—03 南西隅土壘



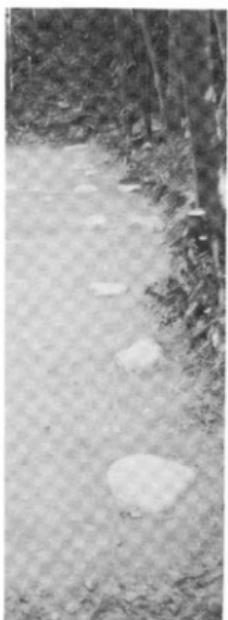
S B—03 西土壘の石垣状遺構



SB—03 発掘状況



SB—03 発掘状態（北より）

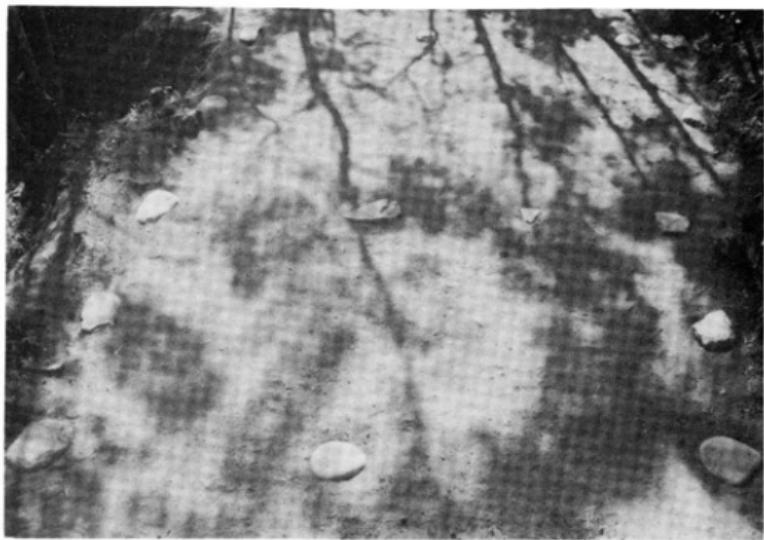


(左)

S B-03 A列礫石（北より）

(右)

S B-03 B列礫石（北より）



S B-03 北部礫石（北より）



SB-03 7列礎石（東より）



SB-03 3列礎石（東より）



追手部全景（東より）



西側土壘全景（東より）



西側土壘追手部石垣遺構（東より）



西側土壘腰巻石垣（南西より）



西側土壘腰巻石垣（東より）



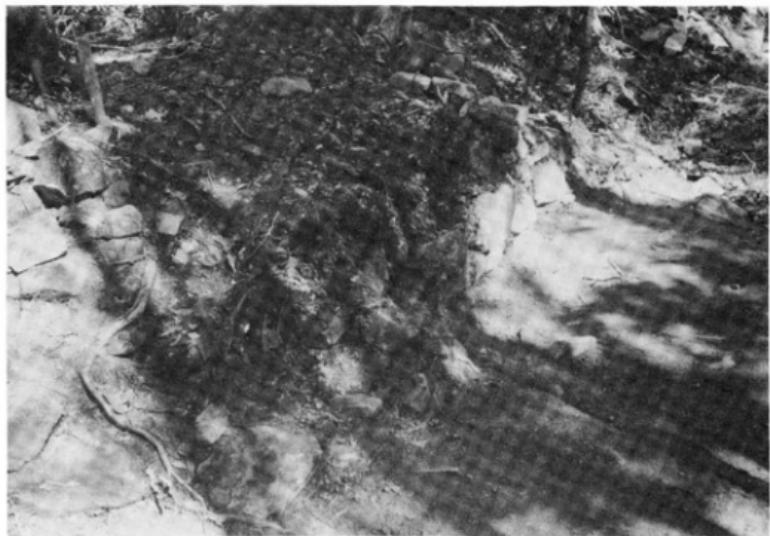
西側土壘より東側土壘をのぞむ



東側土壘土盛状況（西より）



東側土壘追手門部腰巻石垣（西より）



東側土壘腰巻石垣（西より）



追手門全景（南より）



追手門部完掘状況（南より）



追手門部 石段（北より）



追手門部 門がまえ東土壇側（北より）



追手門部 門がまえ東土壘側（北より）



追手門部 門がまえ西土壘側（北より）



追手部より二の段への道（下方より）



追手部より二の段への道（上方より）



土壤状遺構発掘前状況



土壤状遺構発掘状況



土壤状遺構完掘状態（北東より）



土壤状遺構完掘状態（南西より）



土壤状造構完掘状態（南より）



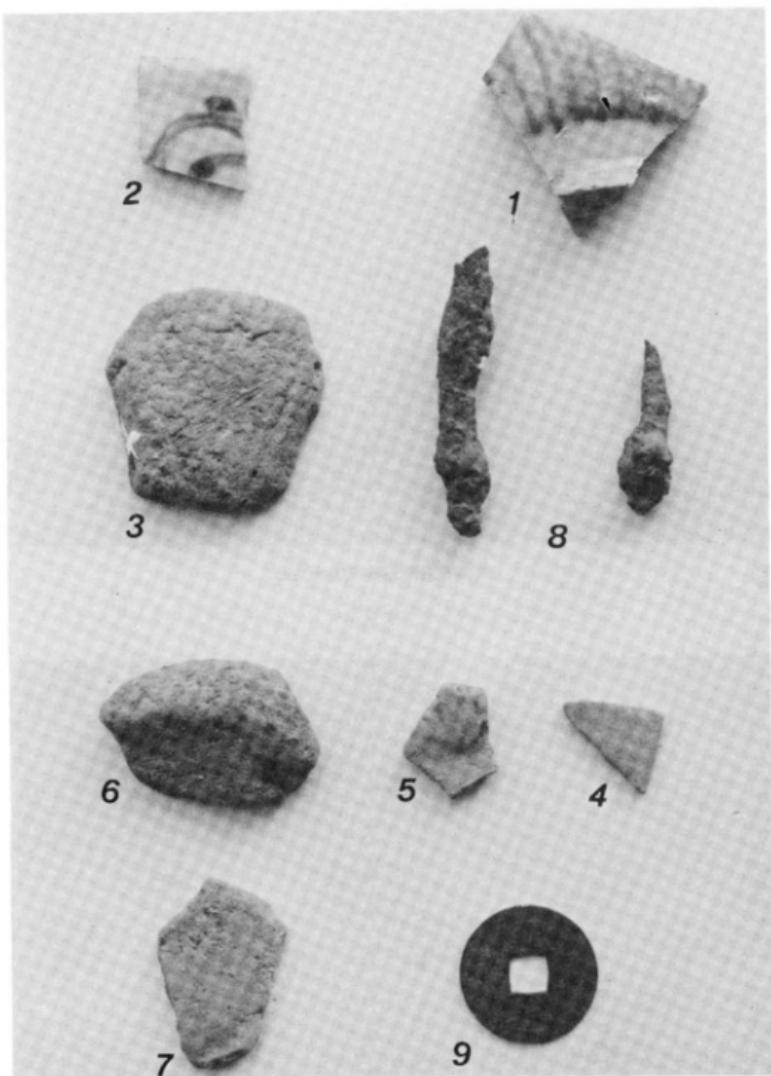
土壤状造構完掘状態（北より）



搦手部西側土壘（北より）



搦手部西土壘（北より）



出土遺物

1. 染付蓮子碗 (SB-01出土) 2. 染付碗口縁部 (SB-03出土) 3. 土師質土器 (SB-01出土)  
4. 5. 6. 7. 土師質土器(土壤状遺構出土) 8. 鉄釘 (SB-01出土) 9. 寛永通宝



全 景（西より）



全 景（東南より）



全 景（西南より）



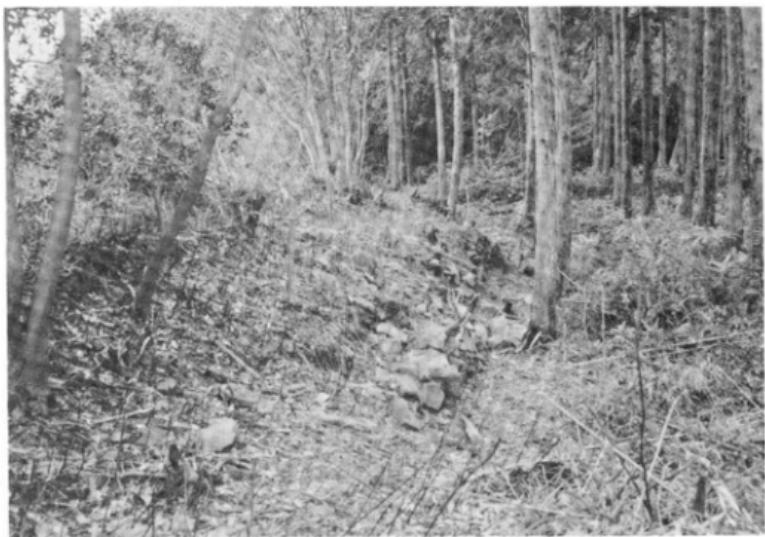
全 景（北西より）



南土壌（西より）



南土壌（西より）



南土壘（東より）



東端北側土壘（南より）



西部石垣造構（西より）



西南隅堅堀部（北より）



二の段より獣手部への登り  
(下方より)



二の段土壘 (東より)



詰より南への尾根堀切部遠景



斜面土壌にみられる石積



三の段下方豎堀



三の段下方堀切り



城跡から久礼湾を望む



調査にたずさわった人々

高知県中土佐町  
久礼城跡

1984年3月

高知県高岡郡中土佐町久礼6602番地2  
中土佐町教育委員会

